

『その葬りへの想い』ヨハネ19:38-42

19:38 そののち、ユダヤ人をはばかり、ひそかにイエスの弟子となったアリマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。

19:39 また、前に、夜、イエスのみもとに行ったニコデモも、没薬と沈香とをまぜたものを百斤ほど持ってきた。

19:40 彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。

19:41 イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。

19:42 その日はユダヤ人の準備の日であったので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。

●序論

「長崎での悲劇を見つめるドキュメンタリーDVD『神の沈黙 ―キリシタン弾圧と原爆―』。そこに生きたキリスト者たちのの息遣いを感じることができる。

「潜伏キリシタン」が迫害をのがれ、その信仰を守るために長崎の五島の小さな島に移り住み、そこで貧しさと周囲の偏見に耐えながらも信仰を守る。

そこで発見されたのは、彼らのお墓です。そこに信仰に生きた彼らの証を見ることができます。ただの石が積まれた墓を見て感動する…不思議です。

でも、そこに信仰者の家族や仲間による、葬りがあった。その人の生涯を思い、感謝と愛をこめて、そして希望を胸に、精いっぱいの葬りがなされていたことが想像できるのです。

さて今日お読みしたところでは、イエスさまの葬りの様子が記録されています。

ヨハネの福音書に特徴的で丁寧にその様子が記されています。

とても「丁寧、丁寧な葬りの様子」が短く、しかしはっきりと描かれています。

ここに、この葬りをした二人の人物を見ていたヨハネの感動を感じるのです。

●本論

I. そこにまっすぐな信仰がある

それはイエスさまを、心から慕い想う、その思いに生きた信仰の人たちでした。

一人はアリマタヤのヨセフ。彼はサンヘドリンの議員。

マルコヤルカは、彼のことを「神の国を待ち望む人」であり、また議会でのイエスさまへの陰謀について、同意しなかった人と語られています。

そしてヨハネは、「ひそかに」しかしはっきりと「イエスの弟子」と記しています。

19:38 そののち、ユダヤ人をはばかり、ひそかにイエスの弟子となったア

リマタヤのヨセフという人が、イエスの死体を取りおろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトはそれを許したので、彼はイエスの死体を取りおろしに行った。

もう一人はニコデモ。

彼は、ヨハネの福音書3章で、イエスさまとの対話が描かれています。彼もまたユダヤ人の指導者の一人でした。

この二人が、十字架上のイエスさまの死を見て、立ち上がったのです。

その十字架の下には、ヨハネ以外の人物について、どの福音書でも記載はありません。

一方でおそらくこの二人は、そこにいて、その死の一部始終を見て、死んでしまった人を捨ててあきらめたのではなく、彼らは逆に一切の恐れを捨て、地位や名誉をも失くとも覚悟で、そこで葬り役を買って出たのです。

そこにあったのは、人が思うところの利口な損得判断ではありません。

しかし、あのイエスさまの十字架は、その十字架上で死なれたイエスさまのお姿は、彼のすべての損得という、信仰を妨げるものを打ち砕いたのです。

「命の冠」という賛美の最期にこういう歌詞があります。

「名誉や富よりも、素晴らしい主イエスのいのちの冠を勝ち取ろう♪」

Ⅱ. そこに丁寧な葬りがあった

アリマタヤのヨセフとニコデモがイエス様を葬った様子は、単なる埋葬ではなく、まるで王を葬る儀式のようでした。 新改訳でこのところをお読みします。

19:39 前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た。

19:40 そこで、彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従って、それを香料といっしょに亜麻布で巻いた。

まず、ニコデモが持ってきた30キログラムもの香料。これは、当時の王族や大金持ちの葬儀に用いられるものであり、非常に高価なもので、これが用いられたのです。さらに、「ユダヤ人の埋葬の習慣に従って、それを香料といっしょに亜麻布で巻いた」とあります。

それは、彼らの心からの尊敬と愛のしるしとして表された埋葬にしたのです。

そして次に、イエス様が葬られたのは新しい墓であったとあります。

19:41 イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。

その墓は、この後起こる復活の出来事を際立たせるための重要な舞台ともなりました。

この丁寧な葬りの様子は、イエス様の生涯が、悲劇的な失敗で終わったのではなく、むしろ神の計画通りに進んだ栄光の出来事であったことを、示します。

そしてだからこそ、わたしたちは今日、信仰の告白で「主は、死にて葬られ」と告白できるのです。

この葬りは、あの二人の信仰の決意と献身的なささげものによって支えられ、今、わたしたちに伝えられているのです。

Ⅲ. そこにヨハネの感動があった

ヨハネは、イエス様が十字架にかかったその場にいた、ただ一人の弟子でした。彼は、その死を間近で見えていました。

そして そのときのヨハネにとって不思議な感動を覚えるものでしただったでしょう。のちに復活されたイエスさまの出来事を知るヨハネには、振り返って思い出すこの二人の献身的な葬りのは、とても大切な意味があるものだとわかったのです。

「神さまが」彼らの献身を用いられたのだという証言としているのです。

この福音書、特にこの十字架の出来事を彼が目撃し、そしてそれがはすべて真実だと彼ははっきりと証言していたことを思い起こしてください。

19:35 それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。

十字架を前に、本物の献身的な信仰が、自分たちではなく、隠れていたはずの人たちから見いだすことができたのです。だからヨハネはここで感動をもって書き記しているのです。

●さいごに

19:42 その日はユダヤ人の準備の日であったので、その墓が近くにあったため、イエスをそこに納めた。

主イエスの埋葬の記事は、イエスさまが、確かに死なれ、葬られたことを証しします。ここで「墓」に収められたことで、普通なら人の生涯は「おしまい」と思うでしょう。

多くの方は、お墓の前に行って、その人を懐かしむ。思い出す。それだけで終わるかもしれません。

でもキリスト教会では、お墓にいったら、もちろん、先に召され人たちの思い出を語

るでしょう。でもそれ以上に、その先人たちが持ち、わたしたちが抱いている、天国の希望、復活の希望を語り、確認するのです。

今日お読みしたこの聖書。イエスさまの生涯を描いた福音書は、どれもイエスさまが死んで墓に葬られたことをはっきり書きます。これは事実だからです。

でも事實は、そこで終わらないのです。三日目に、この墓からよみがえり、弟子たちの前に人々の前に姿を現されたイエスさまの証言へと進むのです。

「墓」は終わりではない。「墓」は、救いを受けたわたしたちクリスチャンにとって、キリストにある、始まりの場所、いのちの証として注目すべき場所となるのです。

約束の言葉を聖書はこう告げます。1テサロニケ4:16-17

…その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。

そしてこう勧められているのです。

4:18 だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい。

「墓」にいのちの希望を見る！ おかしいですか？ でもイエス・キリストを信じる時、これは真実となるのです。それがわたしたちが葬りに際してもいただくことのできる、キリスト由来の想いなのです！